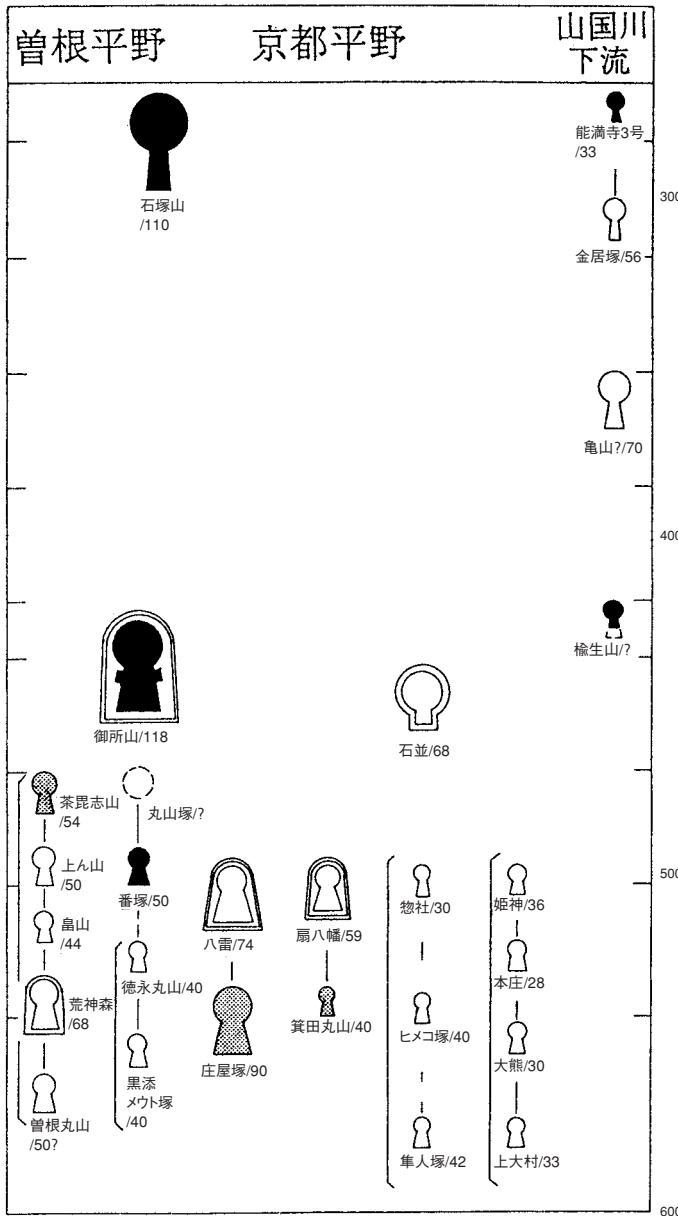


三 古墳文化の衰退

小型化する 五世紀前半ごろの応神・仁徳天皇陵とされる前方後円墳 方後円墳を頂点として古墳は小型化を始め、六世紀に全国的に普及した横穴式石室はその流れに拍車をかけた。遺体を古墳の中心に納めるといふ観念は根強く、そのためには長大な横穴式石室を築く技術的裏付けを必要とした。たと

えば直径六〇メートル程度の後円部をもつ二〇〇メートルクラスの前方後円墳の場合、埋葬部を後円部の中心に置こうとすればその長ささは三〇メートル近くを必要とする（実際には墓道が取り付くために石室長は減じる）。国内最長の横穴式石室が二八・四メートル、二〇メートルを超える石室がほとんどないことを考えれば、一〇〇メートルを超える前方後円墳はもはや基本的な理由とともに、小首長の台頭によつて支



注 黒塗；時期をほぼ確定できるもの
 網掛；時期が前後する可能性のあるもの
 白抜；時期決定の根拠薄弱なもの

図2-117 豊前北部の主要古墳

(重藤輝行「古墳時代中期における北部九州の首長と社会」『第44回埋蔵文化財研究集会 中期古墳の展開と変革』1998より、一部改変)

配領域が細分化された結果、古墳造営に動員できる労働力の総体が小さくなったことも一因といえるかもしれない。京都平野でいえば、五世紀代以前の前方後円墳の石塚山・御所山古墳はいずれも一〇〇メートルを超える規模をもち、石並古墳も周濠を含めた場合には一〇〇メートル近い規模をもつ。同時期の京都平野内陸部に前方後円墳はない。番塚古墳が造られる五世紀末以降は、行橋市長木から勝山町箕田にかけての中部地域、行橋市椿市から荊田町白川の西北地域、豊津町総社から行橋市南泉の南部地域そして山を隔てた犀川町の今川流域などで並立して前方後円墳が造られるようになる(図2-117)。各々の地域ではその領域内でしか動員できないために巨大な墳墓を築くことがもはやできなくなったのである。各地域が同程度の規模の前方後円墳で終わることは、その程度の古墳を造ることしか承認されていなかったのか、あるいは動員能力が同程度であったことを示すのだろう。小首長が台頭し、小地域で前方後円墳が造られるようになった背景には、この地域にも屯倉制・部民制の導入などによってヤマト政権による地域支配がきめ細かくなったことを示す。実際に、比定地は確定しないが勝崎(北九州市門司区・大分県国東郡)・桑原(旧築城郡・田川郡)・肝等(京都郡荊田町)・大抜(北九州市小倉南区)・我鹿(田川郡赤村)などの屯倉が豊前地域に置かれたと『日本書紀』は記す。

当地の多くの古墳は未調査で詳細不明であるが、古墳の大き

さから見て勝山町周辺の古墳群が主導的な地位にあり、橋塚・綾塚古墳にいたるまでその勢力を維持した。橋塚・綾塚に葬られた人物は「豊国造」一族と見なされている。このクラスは小地域の首長が直接に支配する人員を徴発できる、旧郡ほどの広域支配権を有していたものと思われる。

京 築 の 京築地域でも六世紀代以降に各地で群集墳が盛

群 集 墳 行する。調査されたものとしては行橋市渡築紫遺跡、豊津町八景山山麓古墳群、勝山町御手水古墳群、椎田町石堂中後ヶ谷古墳群、大平村金居塚古墳群などが代表的なもので、行橋市竹並遺跡・前田山遺跡、豊津町居屋敷遺跡では横穴墓群も調査されている。そのいくつかを見てみよう(図2-119)。

渡築紫遺跡は稲童海岸に近い台地上にあって、六〇×四〇メートルの範囲の中に二九基の古墳が密集して造られ、最大のもので直径一二メートル、最小のものは墳丘を確認できないが、おそらく五メートルに満たないものと思われる。公表された土器から見ても七世紀代に造られたものようである(行橋市教委「渡築紫遺跡」『行橋市文化財調査報告書』第二三集、一九九四)。

八景山山麓古墳群は八景山東麓に列をなし、かつては一三基以上が一六〇メートルの長さにわたって並んで存在したといわれるが、七基の円墳が現存する。墳丘を確定する調査を行っていないが、およそ直径一〇〇〜二〇〇メートルの円墳群である。最大規模の四号墳は直径二一〜二二メートルの円墳で、巨石構築の複室横穴式石室

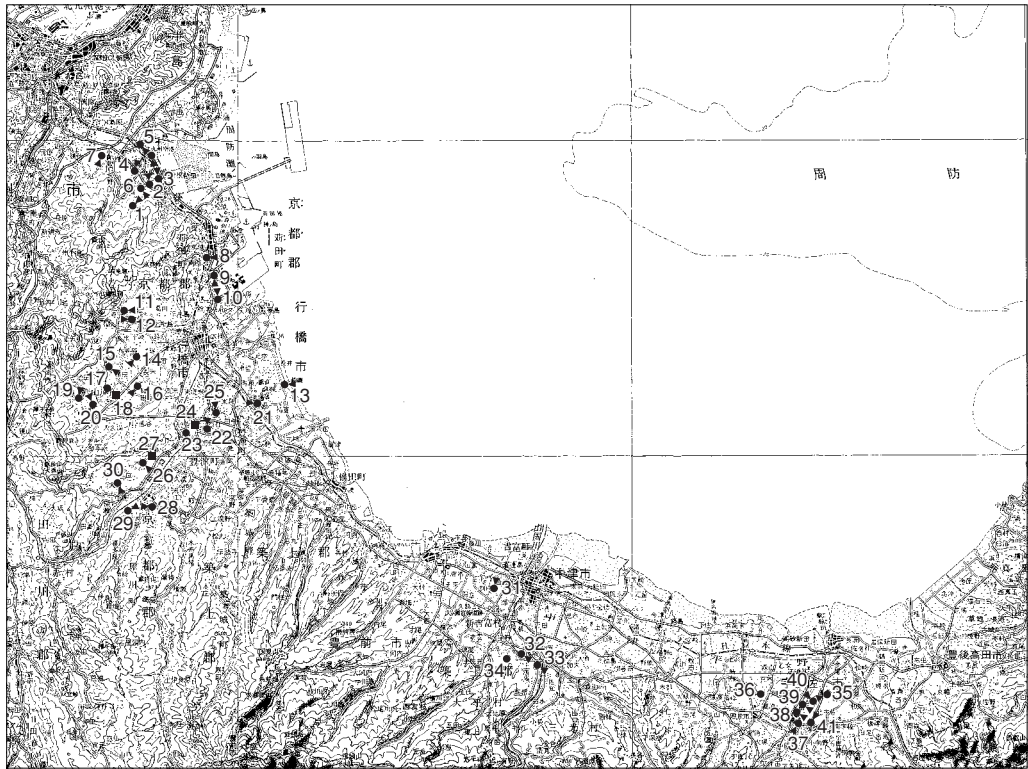


図2—118 豊前の主要古墳

は長さ一二メートルを測る。六世紀後半ごろに相次いで造られた古墳群と考えられている。この古墳群のすぐ南には、直径二九メートルの円墳で二重の周溝をもつ彦徳甲塚古墳、一辺長四六×三六メートルの巨大な甲塚方墳が位置し、六世紀後半の仲津郡最大の首長墓域であった。そして、八景山古墳群のすぐ北には一〇〇〇基を超える横穴墓群の竹並遺跡が位置する。古墳を造営した各階層の墓域がセットで見られる貴重な地域であるが、横穴の多くは消滅した（豊津町教委「八景山山麓古墳群」『豊津町文化財調査報告書』第二一集、一九九九）。

石堂中後ケ谷古墳群は周防灘に近い丘陵上にあり、六〇×五〇メートルの範囲に一五基の古墳が位置する。いずれも直径一〇メートルに満たない小古墳で、互いに等質的である。近接する菜切古墳群も含めて、盗掘を受けているとはいえ出土遺物に玉類や鉄製品が見られない点は異様である。出土土器はほぼ七世紀末から八世紀はじめという、地域で最も新しい様相をみせる（福岡県教委「石堂中後ケ谷古墳群 菜切古墳群 頭無古墳群」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』二、一九九〇）。この付近は狭隘な谷が周防灘に向かって複雑に延びていて、それほどの農業生産性は期待できないものと思われる。出土品がないために確証を欠くが、海での生活を基盤とする集団の墓域であろう。

金居塚古墳群は山国川左岸の段丘肩に位置し、一五〇×八〇メートルの範囲に一六基の古墳と一九基の横穴が確認できる。ここで

表2—12 豊前の主要古墳(数字は図2—117に対応)

番号	古墳名	所在地	墳形	墳長(m)	主体部	外部施設	主要出土遺物	備考
1	御座1号墳	北九州市小倉南区大字貫	前方後円墳	23	粘土槨・木棺直葬	周溝	三角縁神獸鏡片・土師器	
2	峯毘志山古墳	北九州市小倉南区大字貫	前方後円墳	54	横穴式石室	円筒埴輪		前方部削平
3	上ん山遺跡	北九州市小倉南区大字貫	前方後円墳	50		円筒埴輪		
4	畠山古墳	北九州市小倉南区大字田原	前方後円墳	44		円筒埴輪・周溝		消滅
5	荒神森古墳	北九州市小倉南区大字曾根	前方後円墳	68		円筒埴輪・周溝・外堤		
6	両岡様1号古墳	北九州市小倉南区大字貫	前方後円墳	27				
7	観音寺古墳	北九州市小倉南区大字長野	前方後円墳	20				
8	石塚山古墳	京都府菟田町大字南原	前方後円墳	110	竪穴式石室	葺石	三角縁神獸鏡7(+α)・細線式獸帯鏡・小札革綴冑・素環頭太刀・銅鐵・鉄鎌・鉄斧等	
9	番塚古墳	京都府菟田町大字尾倉	前方後円墳	50	横穴式石室		神人歌舞画像鏡1・挂甲・胡祿・鉄刀・鉄矛・鉄鎌・玉類・鉄釘・須惠器等	
10	御所山古墳	京都府菟田町大字与原	前方後円墳	118	横穴式石室	円筒埴輪・周溝・葺石	四禽四乳鏡1・甲冑片・金銅製馬具片・玉類・鉄鎌	
11	黒添夫婦塚古墳	京都府菟田町大字黒添	前方後円墳	40				
12	徳永丸山古墳	行橋市大字徳永	前方後円墳	40				
13	石並古墳	行橋市大字稲童	帆立貝式前方後円墳	68		円筒埴輪・周溝・葺石		
14	八雷古墳	行橋市大字長木	前方後円墳	74		埴輪・周溝・外堤		
15	寺田川古墳	勝山町大字中黒田	前方後円墳	19	横穴式石室	円筒埴輪	人骨片・鏡・土師器片	
16	庄屋塚古墳	勝山町大字中黒田	前方後円墳	81+	横穴式石室(前方部)	円筒埴輪	須惠器(前方部石室)	
17	綾塚古墳	勝山町大字中黒田	円墳	40	横穴式石室	周溝		家形石棺
18	橋塚古墳	勝山町大字上黒田	方墳	40	横穴式石室	周溝	須惠器	
19	扇八幡古墳	勝山町大字箕田	前方後円墳	58		円筒埴輪・周溝・外堤・葺石		
20	箕田丸山古墳	勝山町大字箕田	前方後円墳	40	横穴式石室(後円部・前方部)	円筒埴輪・葺石	変形後獸鏡・単龍環頭太刀ほか太刀・金銅製馬具・鉄鍬・鉄鎌・玉類・須惠器(前方部石室)	
21	隼人塚古墳	行橋市大字高瀬	前方後円墳	39	横穴式石室		太刀・鉄製馬具・弓金具・玉類・須惠器等	
22	惣社古墳	京都府豊津町大字惣社	前方後円墳	20	横穴式石室			
23	彦徳甲塚古墳	京都府豊津町大字彦徳	円墳	29				
24	甲塚古墳	京都府豊津町大字甲塚	方墳	46×36	横穴式石室	周溝・外堤・葺石	須惠器	
25	ヒメコ塚古墳	行橋市大字竹並	前方後円墳	50	横穴式石室			前方部削平
26	姫神古墳	京都府犀川町大字木山	前方後円墳	37				
27	三ツ塚方墳	京都府犀川町大字花熊	方墳	23		周溝・外堤		
28	本庄古墳	京都府犀川町大字本庄	前方後円墳	30				
29	大熊古墳	京都府犀川町大字大熊	前方後円墳	40		円筒埴輪		
30	上大村古墳	京都府犀川町大字大村	前方後円墳	30	横穴式石室			
31	楡生山古墳	築上郡吉富町大字楡生	前方後円墳	17+				
32	能満寺3号墳	築上郡大平村大字下唐原	前方後円墳	33	竪穴式石室(大破)	周溝・葺石	獸帯鏡1・夔鳳鏡片	
33	西方古墳	築上郡大平村大字下唐原	前方後円墳	53+		葺石		
34	穴ヶ葉山1号墳	築上郡大平村大字下唐原	円墳	30	横穴式石室	周溝	須惠器・土師器	線刻画・山陰系裝飾土器
35	赤塚古墳	大分県宇佐市大字高森	前方後円墳	58	箱式石棺	周溝	三角縁神獸鏡4・盤龍鏡1・太刀・鉄斧・玉類・土師器	
36	葛原古墳	大分県宇佐市大字葛原	円墳	55	横穴式石室	円筒埴輪	四神四獸鏡1(+α)・短甲・眉此付冑・刀子・玉類・須惠器	帆立貝式カ
37	免ヶ平古墳	大分県宇佐市大字川部	前方後円墳	50	竪穴式石室・箱式石棺		斜縁二神二獸鏡1・仿製三角縁神獸鏡1・碧玉製石釧3・玉類・鉄製品(刀・劍類・農工具類)	前方部削平
38	福勝寺古墳	大分県宇佐市大字高森	前方後円墳	78				
39	車坂古墳	大分県宇佐市大字川部	前方後円墳	55		周溝・葺石		
40	角房古墳	大分県宇佐市大字高森	前方後円墳	46		周溝・葺石		前方部削平
41	鶴見古墳	大分県宇佐市大字川部	前方後円墳	30	横穴式石室	周溝	鉄製馬具・鉄鎌・刀子・須惠器	

第4章 古墳時代

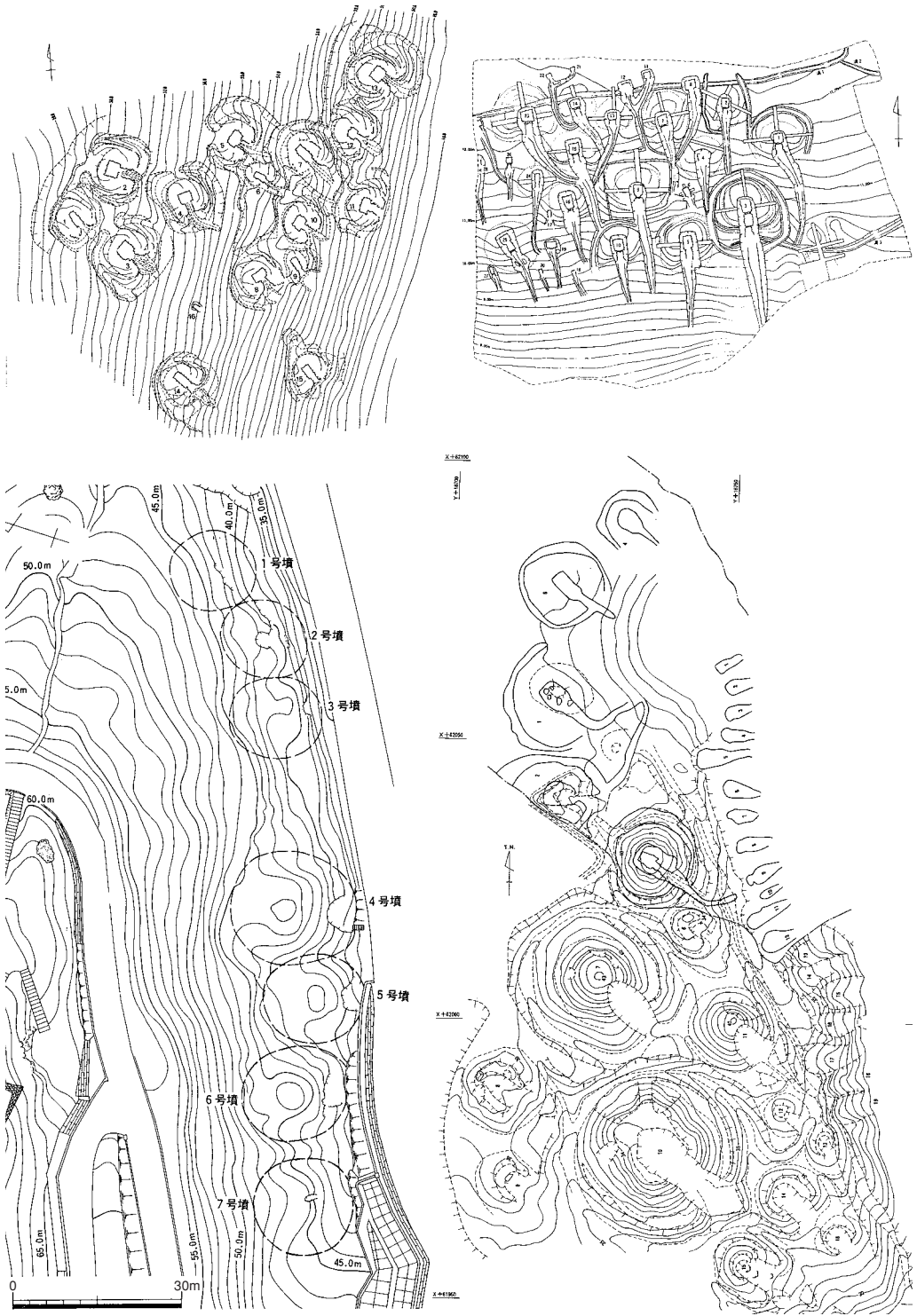


図2-119 豊前の主要群集墳 (各報告書より、縮尺同一)
 左上；椎田町中後ヶ谷古墳群 右上；行橋市渡筑紫遺跡
 左下；豊津町八景山山麓古墳群 右下；大平村金居塚古墳群

は、直径三〇センチ、同二五センチの大型円墳の周辺に同一〇センチ前後の小古墳が寄り添うように接し、その下位の段丘法面に横穴が掘削されている。四基の円墳と一二基の横穴を発掘調査し、その限りでは六世紀後半から末葉にかけて営まれたものである。残された副葬品から、円墳と横穴墓との間には明らかな階層的差異が見られた。直径三〇センチを超える円墳は前方後円形ではないけれども、六世紀後半の当地では最高クラスの規模で、最有力豪族の墳墓とその一族や構成員を含めた墓域であったと思われる（福岡県教委「金居塚古墳群Ⅰ」「一般国道一〇号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第四集、一九九六）。

八景山山麓古墳群は比較的等質な古墳で構成されるが、近接して首長墓や横穴墓群が存在することから金居塚古墳群のありかたに近いと考えてもよいであろう。一方、渡築紫遺跡では相互の古墳規模に格差があり、群内部で優劣が見てとれるとはいふものの、最大で直径一〇センチ程度の古墳に過ぎない。また、中後ヶ谷古墳群は等質な小古墳で構成され、近接する葉切古墳群を含めても有力古墳が近辺に存在しない点で同様である。このように群集墳にもさまざまな形が見られるが、首長墳に近接する場合は地域の支配体系の裾野の拡大、首長墳と遊離する場合には全く新たな集団を支配下に置く―その場合にも広域的な首長を介したのであるが―といった、ヤマト政権の勢力拡大の方法が異なっていたのではなからうか。

九州最後 政権中枢部の畿内地方では、前方後円墳は六世紀の古墳 紀末をもってほぼ築造を停止し、畿内の大王や

有力豪族は大型の方墳や円墳を造るようになる。やがて七世紀中ごろに大王墳のみは八角形墳を採用して独自の道を歩む。このことは大王権の一層の飛躍を意味するものである。また、中央・地方を問わず、方墳に蘇我氏の影響を強く読みとる説がある（白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』一、一九八二）。

九州最末期の前方後円墳は定かではないが、六世紀後半―末のころには当地でも大小の方墳や大型円墳が現れる。福岡県内では町内橋塚（方墳）・綾塚（円墳）、豊津町彦徳甲塚古墳（円墳）・甲塚方墳、大平村穴ヶ葉山一号墳、福津市宮地嶽古墳（円墳）などが代表的なものである。町内の二古墳については別稿に譲るが、甲塚方墳・穴ヶ葉山一号墳・宮地嶽古墳はやや詳しく紹介しよう。

甲塚方墳は、県道椎田勝山線と国道四九六号線の交差点の南西、八景山から南へのびる丘陵上に位置する。東西長四六・五センチ、南北長三六・四センチの大型長方形墳で、周溝底からの高さは九・五センチを測る。三段築成され、全面に葺石を施していた。周囲の地形改変が進んでいるが、幅三〇七・五センチの浅い周溝、さらに外側に三〇センチの土手（周堤）が巡らされていた。これらを含めた墓域は六〇〇七〇センチに復元され、畿内の有力古墳に

も匹敵するものである。各辺及び主体部はほぼ正確に方位に乗っている。主体部は複室横穴式石室で、玄室は四・四×三・七の正方形に近い長方形プランとなり、高さは四・六を測る巨大なもので、全長は一〇弱である。出土した須恵器から六世紀末に近い時期が考えられよう（豊津町教委「甲塚方墳」『豊津町文化財調査報告書』第一三集、一九九四）。

穴ヶ葉山一号墳は大平村下唐原の丘陵斜面に位置する、直径三〇ほどの円墳である。斜面に位置するために、下位斜面に厚く土を盛って段築状となる。主体部は単室の横穴式石室で、玄室はそれぞれ一枚石で構成される。規模は三・二×二・四、高さは二・二を測る。羨道部は左右ともに基本的に各三枚の巨石で構成され、その長さは五・四ほどである。この古墳では羨道部側壁に葉・鳥・人物等が線刻されるとともに、出土品の中に雲系の特異な子持土器が多数含まれる点が特徴的である。つまみ付き杯蓋などが良好な状態で出土し、七世紀前半の築造と考えられる（大平村教委「史跡穴ヶ葉山古墳」『大平村文化財調査報告書』第一〇集、一九九四）。

宮地嶽古墳は宮地嶽神社境内にあり、不動尊が祀られているために細部に不明なところがある。古墳は現状で二七〜三四の楕円形を呈するが、本来三五ほどであったと推測されている。主体部は非常に特異な横穴式石室である。前端部は積み直しがされるが、巨石を使用した部分だけで二二の長さをもち、

最大幅三、高さも三を測る。石材も巨大なもので、高さ三以上、幅四の巨石が立て並べられ、床・天井にも巨石が使用されている。通常の横穴式石室とは異なって、いわゆる玄室はない。石室中央部のやや奥寄りの両側壁に龕と呼ばれる彫込みがあり、最奥部で大きく幅が減じるとともに高さもわずかに低くなっている。床面の形状が不明であるが、おそらく床も一段高くなっているであろう。畿内地方で盛行した横口式石槨の要素を取り入れているものと考えられている。昭和九年（一九三四）、社務所を作る際に遺物が発見された。長さ二・四におよぶ巨大な飾り太刀や金銅製馬具、ガラス板などで、後に近くから金銅製冠も出土している。いずれも一級品である。この古墳の被葬者として、天武天皇との間に高市皇子を生んだ尼子娘の父親、胸形君徳善の名前が有力な候補者として挙げられている（佐田茂ほか「原始」『津屋崎町史通史編』一九九四）。その場合には、この古墳が造られた年代を七世紀の中ごろを中心とする時期に比定できよう。徳善の生没は不明であるが、高市皇子は六五三年ごろに出生している。

今一つ、九州で最後の古墳と考えられているものに一辺長二の方墳である大分市古宮古墳がある。主体部は巨大な凝灰岩に、長さ二、幅〇・八、高さ〇・八ほどの直方体の空間を削り抜いたもので、前面に長さ二・五前後の羨道部が取り付いている。こうした構造は横口式石槨と呼ばれ、すで

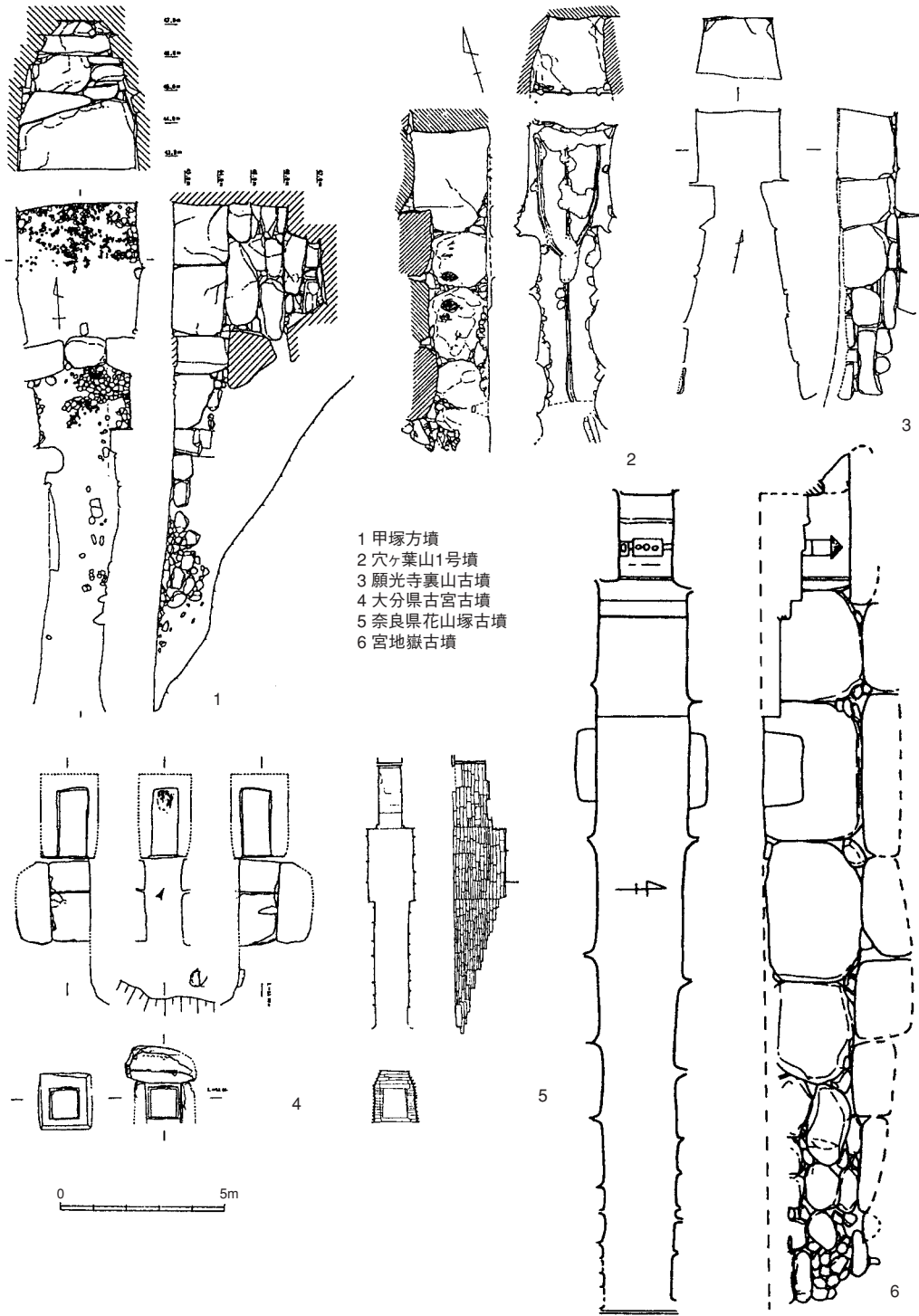


図2—120 北部九州の最後の古墳（各報告書より）

に一般に古墳が造られなくなった七世紀中ごろから大阪府や奈良県下で使用されたものである。当然、築造した人々は大王一族や有力な豪族であったものと思われる。九州に唯一、存在するこの古墳の被葬者には、天武天皇に因わって『日本書紀』に登場する大分君恵尺・稚見の二人が想定されていて、七世紀後半に考えられている。

七世紀中葉以降も椎田町後ヶ谷古墳群や行橋市渡築紫遺跡などではまだ小古墳が造られていた。首長クラスの古墳築造は定かでないが、行橋市願光寺裏山古墳が七世紀中ごろと考えられている。この古墳は発掘がなされていないために詳細は不明であるが、石室の実測図が公開されている。それによれば、長さ二・二^{メートル}、幅二・六^{メートル}のやや横長の玄室をもち、羨道は前端部で幅三・六^{メートル}と大きく開く。また、天井部は玄室・羨道の区別がなく、水平に架構される点の特徴とする。玄室はほぼ四壁とも一枚石、羨道部も一枚石ないしは小振りの石材を併用する二段で構成されている。この石室形態に最も近いものは大平村穴ヶ葉山一号墳である。穴ヶ葉山一号墳も玄室は各一枚石で構成され、羨道部の天井石が玄室に張り出して、空間的にはほぼ正方形に近い。異なる点は天井石の高さ、羨道部が直線的となるか、幅広となるかである。これらの点から見れば、願光寺裏山古墳は穴ヶ葉山一号墳に後出することが首肯され、七世紀中葉に比定しても大過ない。京築最後の首長墳である。

第四節 勝山町の古墳時代

一 概観

勝山町に文化財専門職員が配置されたのは平成四年のこと、それ以前の文化財保護活動は中学教員であった定村貢二・川本義継らの貢献が非常に大きかった。現在も重要な基本資料である遺跡分布図は、主として彼らの作成したデータをもとにしたものである。また、定村・川本らの献身的な努力でいくつかの遺跡が破壊を免れ、失われた遺跡の記録が作成された。

さて、町内の古墳時代の遺跡分布を図2-121に示したが、ここには、現在では失われた、あるいは確認できないものもあわせて図示している。

古墳は、町域の南北・西を限る山塊から派生した丘陵上にはほぼ満遍なく分布するが、国道二〇一号線の南に広がる稗田地区の丘陵上はほぼ空白地帯となる。ここはバイラン土（真砂土）を地盤とし、石材の入手が困難なためであろう。周囲の山塊には花崗岩や変成岩が多く露出している。

首長墓の系列は、前方後円墳の寺田川古墳（二〇^{メートル}）を嚆矢とし、扇八幡古墳（五八^{メートル}）・箕田丸山古墳（四〇^{メートル}）・庄屋塚古墳（八一^{メートル}以上）、その後に行橋市長木の八雷神社古墳（七三